ツォンカパによる縁起観の展開
――『六十頌如理論注』を中心として――

安武智丸

ツォンカパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal, 1357-1419 A.D.）は、龍樹―月称と伝統された中観帰謬論証派の仏教を仏教の正統として選び取り、その教えの核心を最初期の論書である『菩提道次第広論』の中で「中観不共の勝法（dbu ma'i thun mong ma yin pa'i khad chos）」として次のように述べている。「縁起（rten 'brel）に拠って無自性に決定を与える方軌と、自性として空性である諸存在が因果（縁起）として顕現する在り方とを、他には導き得ない決定に導くべきである。」それ以降の彼の論書の中で度々繰り返されることになるこの言明は、ツォンカパが受容した仏教すなわち空性思想の性格を端的に表すと同時に彼の縁起観そのものをも示すものである。ここでは無自性空という真実性を軸として縁起の二つの側面が提示されている。すなわち無自性空の根拠である法性としての縁起と、無自性空の実現である法としての縁起である。縁起の法性が縁起の法を実現するという極めてシンプルなこの命題を論証するために、ツォンカパはその内実としての空性思想を徹底的に吟味していく。しかし『菩提道次第広論』において略語〈rten 'brel〉のみによって表記されていた「縁起（rten cing 'brel bar 'byung ba）」は、以降の著作の中では〈rten 'brel〉と〈rten 'byung〉という二種の略語によって表記されていくことになる。ツォンカパは法性としての縁起を〈rten 'byung〉として、法としての縁起を〈rten 'brel〉として表記し分けることによって、上述の空性・縁起思想の構造をより明確にしたのである。[1]

さて本発表で採り上げるツォンカパの『六十頌如理論注』（以下『注』[2]）は龍樹の「六如理論」の中で根本論である『中論』以外に唯一注釈された『六十頌如理論』の簡略な註釈である。そもそも『六十頌如理論』（以下『論』）そのものが龍樹の縁起論であり、『中論』とともに帰敬偈を備えている点からもその独自性が諸註釈者によって注目されてきた。ツォンカパは『中論』注『正理大海』の中で「六如理論」の性格を「有無の辺を離れている縁起（rten 'byung）の真実性を主として説示するもの」と「有無の辺を見ることなき道によって輪廻より解脱することを主として説示するもの」とに大きく二分し、後者に『論』と『宝行王正論』とを位置付けている。このような位置付けは本『論』が「縁起の真実性」に基づいて「縁起なる世界の確立」を志向する論であることを示すものではないだろうか。そこで二種の「縁起」の略語を手がかりとして『論』の構造を概観する中で『注』におけるツォンカパの縁起観の展開を跡づけていきたい。

ツォンカパは『論』冒頭の帰敬偈「生起と消滅とを離れているこの道理によって、縁起（rten cing 'byung ba）を説き給える彼の牟尼に礼拝し奉る」を注釈する中で、『注』そのものの構造と縁起観の展開を明示する。先ず釈尊への礼拝の根拠を「自性としての生滅を離れている縁起（rten cing 'brel 'byung）を自在に説き給えるから」であると示し、釈尊が牟尼と言われる根拠を「相互依存の因果としてのこの道理（tshul）によって、自性として生滅する縁起（rten 'brel）を離れる道理を自在に説示されてい

るから」と述べる中で、論の主題である「離辺の縁起」が「相互依存の因果としての縁起」と等置される。すなわち離辺の根拠が相互依存に求められ、同時にその縁起は因果として成立することが示されている。ツォンカパは更に理由として述べられた次の三項目によって、離辺の縁起の具体性と、その展開を示して言う。

(1)　この（相互依存の因果としての）縁起（rten 'brel）の道理（tshul）によって、自性として生滅する縁起（rten 'brel）を離れる道理を自在に説示されているからであり、また、(2)　この（相互依存の因果としての縁起の）説示の次第である断ずる縁起（rten 'brel）の道理によって、自性として生滅する縁起（rten 'brel）を離れる道理を自在に説示されているからであり、その後に、(3)　断ずる正理（rigs pa'i tshul）によって、離れる道理を自在に説示されているからである。

ここで示された縁起の展開は、同時に次の「縁起」の三つの意味を提示するものである。

(A)　自性として生滅する縁起（rten 'brel）

(B)　(A)を相互依存を根拠として断ずる正理（rigs pa'i tshul）としての縁起（rten 'brel）

(C)　(A)を離れている因果の道理としての縁起（rten 'brel）

この三つの「縁起」は、(A)の否定原理として(B)が、(B)を成立根拠として(C)が成り立つという関係にある。ツォンカパはここで〈rten 'brel〉という同一の「縁起」表記によって、むしろ各々の「縁起」の有する意味の相違を浮き彫りにし、その相互関係を明らかにするのである。『注』はこの三つの「縁起」の関係を基本的な構造として、更にそこに二種の「縁起」の略語表記を用いることによって、(A)〈rten 'brel〉→(B)〈rten 'byung〉→(C)〈rten 'brel〉という縁起観の展開と『論』全体の構造を明らかにしていく。つまり『注』においてツォンカパは、妄分別された縁起が縁起の法性（空性）によって否定される中で明かとなる縁起なる世界、そこではじめて輪廻からの解脱が可能となる仏道を、三つの縁起の意味と二つの「縁起」表記とを用いることによって成り立たしめようとしたのである。

註

① 拙論「rten 'byung と rten 'brel —ツォンカパによる「縁起」解釈—」（『大谷大学大学院研究紀要』第14号、1997. pp. 1-24）参照。

② 具さには『尊者ツォンカパがお説きになられるままに法王ギャルツァップが記録された『六十頌如理論』に関する覚書』（*Rigs pa drug cu pa'i zin bris rje'i gsung bzhin rgyal tshab chos rjes bkod pa bzhugs so*）The collected Works of rJe Tsong kha pa blo bzsng gragsパ, vol. 23. New Delhi 1979.